



【支援企業紹介】北上市 株式会社 北上エレメック

北上市で創業して40年余り。今や時計部品から自動車関連部品まで、北上エレメックの作る製品は多岐に渡る。顧客に学び、企業同士の繋がりを大事にする同社の戦略を菅原康裕社長に伺った。

【いわて産業振興センターの活用実績】
レーザー溶接機ほかの設備貸与や取引あっせん、生産改善指導などを通じ企業体制を強化。さらに会社の実力を上げていくために研修制度などの充実を希望している

高度な機械加工技術を武器に 顧客のあらゆる要望に応える

昭和40年代は、日本工業が従来の鉄鋼や石油化学などから組立加工などの機械工業へと変化していった時期である。北上市に本社をおく北上エレメックも昭和48年、前年に創業した関連会社の北上精密とともに時計部品加工からスタートする。以来2社は連携しながら、時代に合わせ事業内容を変化・拡大させてきた。

50年代は半導体の時代である。同社もいち早く参入するが、組立加工のみならず金型部門や装置メンテナンス部門までも立ち上げてしまう。「これが他の機械装置にも展開でき、社内

実力の向上に繋がった」と菅原康裕社長は振り返る。昭和61年にプラスチックの金型設計と射出成形を開始すると、わずか数年でコネクタ成形組立にも進出。一方の北上精密も、超硬合金を使用した金型製作に県内でいち早く取り組んでいく。その実績が評価され、平成18年にはアルミ缶用成形金型の製造を県内で唯一開始した。「メーカーで1年の研修をし、設備ごと岩手へ移管されました。寸法精度などの厳しい要望にも、当社で蓄積してきたメンテナンス技術で対応できました」。北上精密の小原初弘社長が胸を張る。

「顧客の要望を実現するためには顧客から教えてもらうことです」。菅原社

長がきっぱりと話すように同社では客先研修などを行い、メーカーや協力企業へ積極的に働きかけてきた。その中でニーズの掘り起こしと技術革新に努め続けてきたのだ。

自動車産業参入、工場買い取り 業界再編の今こそ攻めの姿勢で

現在は「金型事業」「射出成形や金属プレス等の量産体制」「装置メンテナンス」を事業の3本柱とし、金型から製品提供、さらには自社内で装置製作も行えるまでに。だが菅原社長はさらなる連携を探り、平成16年に経産省のモデル事業採択を受けて市内の同業会社2社と自動車部品の協同受

注グループ「プラ21」を設立した。

「そもそもは2000年代の半導体不況を受け、自動車業界への糸口をつかむため取り組んだもの。ただ自動車の場合、従来の設備では対応できない大型部品もあり、設備投資をしなげらの展開でした」。その挑戦は実を結び、シート周りなど多くの自動車部品の供給が始まっている。

挑戦はこれにとどまらず、昨年2月には宮城県亘理町にある日立マクセルの袖ヶ沢工場を買い取り、一眼レフカメラ等の光学レンズ鏡筒部品の製造を開始。アルミ缶金型と同様に大きな事業移管だが「こういう『事業丸ごとを受けて欲しい』という要望がたまにある」と菅原社長。金型から装置のメ

ンテナンスまで行える同社だからこそ、メーカーも事業を託すのだろう。もちろん、この宮城工場からも自動車関連部品の供給を目指している。「宮城という立地と、光学関係の高い金型技術は大きな宣伝材料。我々の技術の幅が広がり、顧客の要望にもっと応えられる」と菅原社長は期待している。

「日本工業界は今、再編の真っただ中にあります。仕事のボリュームが減り、より高度なものが求められる中では、単独ではなく中小企業同士が手を結び、技術レベルでの連携や仕事上の情報交換を積極的に行っていくなくては」。菅原社長は厳しく、その先を見つめていた。

情報を受けて
与えることが仕事獲得への一歩

短納期・低コスト・高品質というニーズに応えるためには技術の向上は必須ですが、仕事そのものを逃さないためには共同で受注し、互いの技術を補うなど企業同士が手を組む必要性もあると思う。そのためにも情報を受ける・与えるのキャッチボールも大事にしています。

技アリ!ポイント



株式会社 北上精密
代表取締役社長 小原 初弘

企業データ

会社名 株式会社 北上エレメック
本社 北上市鬼柳町都鳥133
電話 0197-67-3231
代表者 菅原 康裕

創業 昭和48年(1973年)3月
従業員 125名
業種 プラスチック金型設計製作・加工
URL <http://www.kitakami.ne.jp/~ksnet/vflame7.html>